

国際園芸博覧会政府展示施設(仮称)(23)基本設計業務
設計者特定結果

令和6年2月

国土交通省
関東地方整備局

目次

1. 業務の概要	… 1
2. 設計者の特定手続き	… 1
3. 特定までの経緯	… 2
4. 技術提案書提出者の選定	… 2
5. 技術提案書の特定	… 3
6. 講評	… 4

<参考> 「国際園芸博覧会政府展示施設(仮称)(23)基本設計業務

技術提案書評価委員会」議事概要

1. 業務の概要

(1) 業務名

国際園芸博覧会政府展示施設(仮称)(23)基本設計業務(以下「本業務」という。)

(2) 履行期間

2024年2月～2024年6月

(3) 業務内容

「2027年国際園芸博覧会政府出展基本計画」(2023年8月 農林水産省・国土交通省策定)に基づき、国際園芸博覧会政府展示施設(仮称)の基本設計業務を行うものである。

2. 設計者の特定手続き

(1) 設計者の特定方式

公募型プロポーザル方式により設計者を特定した。

(2) 設計者の特定に係る体制

本業務の設計者の特定手続きには、より一層の客観性が求められるため、外部有識者を含む「国際園芸博覧会政府展示施設(仮称)(23)基本設計業務に関する技術提案書評価委員会」(以下「技術提案書評価委員会」という。)を設置して、技術提案書の評価等を行った。

(3) 技術提案書評価委員会の構成

<委員長>	古谷 誠章	早稲田大学総合理工学部 教授
<委員>	今村 創平	千葉工業大学創造工学部 教授
<委員>	田中 稲子	横浜国立大学大学院都市イノベーション研究院 都市イノベーション部門 教授
<委員>	末兼 徹也	国土交通省関東地方整備局 営繕部長
<委員>	外崎 康弘	国土交通省関東地方整備局営繕部 整備課長

3. 特定までの経緯

設計者の特定までの主な経緯は、次のとおりである。

- ・ 第1回技術提案書評価委員会 令和5年9月13日(水)
- ・ 手続開始の公示 令和5年10月3日(火)
- ・ 参加表明書の提出 ～令和5年10月18日(水)
- ・ 技術提案書の提出者の選定 令和5年10月31日(火)
- ・ 技術提案書の提出 ～令和5年12月11日(月)
- ・ 第2回技術提案書評価委員会 令和5年12月13日(水)
(技術提案書を提出した者に対するヒアリングの実施)
- ・ 第3回技術提案書評価委員会 令和5年12月15日(金)
- ・ 技術提案書の特定(設計者の特定) 令和6年1月11日(木)

4. 技術提案書提出者の選定

(1) 技術提案書提出者の選定の概要

本業務においては、技術提案書の提出者を選定するための基準に基づき、参加表明書を提出した者の審査を行い、技術提案書の提出者を選定する。

1者から参加表明書の提出があり、審査を行った結果、1者を技術提案書の提出者に選定した。

(2) 技術提案書の提出者

- ・ 国際園芸博覧会政府展示施設(仮称)(23)基本設計業務日本工営都市空間・昭和設計設計共同体

5. 技術提案書の特定(設計者の特定)

(1) 技術提案書の特定(設計者の特定)の概要

技術提案書評価委員会は、技術提案書の提出者に対するヒアリングを行ったうえで、技術提案書を特定するための基準に基づき、技術提案書を評価した。

国土交通省関東地方整備局は、技術提案書評価委員会から評価結果の報告を受け、国際園芸博覧会政府展示施設(仮称)(23)基本設計業務日本工営都市空間・昭和設計設計共同体の技術提案書を特定した。

(2) 得点

提出者	資格・ 技術力	業務の実施方針 及び手法	合計
配点	30	70	100
提出者 I ＜ 国際園芸博覧会政府展 示施設(仮称)(23)基本設 計業務日本工営都市空間・ 昭和設計設計共同体＞	17.42	51.24	68.66

6. 講評(技術提案書評価委員会による業務の実施方針及び手法の評価について)

(1) 総評

業務の実施方針及び手法については、業務の理解度及び取り組み意欲、業務の実施方針、並びに評価テーマに対する技術提案を着目点として評価する。

技術提案書評価委員会は業務内容を踏まえ、次の3つの評価テーマを設定した。

- ① 博覧会のテーマを先導する政府出展の意義、理念及び本区域の特性を踏まえ、自然との共生による日本の暮らし、日本の風景、伝統的な技術を見つめ直すとともに、今日の知見・技術を反映した多様な空間構成(東西の空間を渡りによって接続、半屋外や半屋内の空間を創出・活用し、建築物と屋外空間が連続的に接続され相互に融合した空間、リアルとデジタルが融合した空間等)を具体的な形にしていくために、設計上特に配慮する事項
- ② 国際社会の目標である SDGs達成への貢献が求められる状況を踏まえ、持続可能な資源利用を積極的に目指し、本博覧会終了後の材料の再利用など、カーボンニュートラルへのアプローチや資源循環型の建築(3R)を実現していくために、設計上特に配慮する事項
- ③ 本博覧会関係者(展示業務関係者含む)との協働により、本プロジェクトを進めていく必要があることを踏まえ、今後決定される展示計画と建築設計の整合を図り、建築物自体も展示となるような性質をもたせる構想を具体的な形にしていくために、設計上特に配慮する事項

技術提案書を提出した者は、業務の実施方針や評価テーマに対する技術提案において、それぞれのノウハウを活かして特徴のある提案を行った。

限られた期間でこれほどの提案を行った者の技術力を高く評価するとともに、その熱意に多大なる敬意を表する。

(2)個別講評

(注) 提出者の提案について、委員長を含む個々の委員が評価できるとした意見を、列記したものである。評価できるとした意見が複数の委員において重複した場合は、集約して記載した。

提出者 I <国際園芸博覧会政府展示施設(仮称)(23)基本設計業務日本
工営都市空間・昭和設計設計共同体>

ア 業務の理解度及び取り組み意欲、並びに業務の実施方針

B 取組体制

2社の得意とする技術や経験を活かす設計 JV

- 「万博の設計経験を持つ建築事務所と上瀬谷周辺の環境評価実績を持つ建設コンサルタントが、双方の経験・技術と総合力を活かした設計 JV で臨みます」が評価できる。
- 「横浜市内や関東地整発注の豊富な建築設計実績を持つ管理技術者を中心に、毎週開催する JV 会議では常に各主任担当者と情報を一元化し迅速かつ柔軟な姿勢で、課題解決に取り組みます」が評価できる。
- 「当博覧会の意義を理解した上で、展示設計も統合した BIM データを一本化し、工事区分だけでなく双方の納まりやデザイン等、関係者間の会議を開催します」が評価できる。

イ 評価テーマに対する技術提案

■特定テーマに対する技術提案①(様式7-1)

A 豊かな森林景観や起伏と融合する施設

自然資源と景観軸を活かす緩やかな軒

- 「西側～東側建物をシームレスにつなぐ縁側に、来場者が自由に屋内外の展示を回遊したり、庭園や眺望を楽しみながら時間を過ごせる、半屋内外の中間領域を形成します」が評価できる。
- 「エントランス周辺で多くの来場者が待機できる軒下や滞留空間を確保」が評

価できる。

イルカ丘陵をなす微地形や環境に呼応した施設

- 「地形改変を極力避けるため高床形式とし東西約 2mのレベル差を建物内で吸収します。スロープを最小限として段差なく屋外展示に出入りできる計画とします」が評価できる。

B 自由な回遊動線と連携した多様な空間の創出

屋内外展示と連携する豊かな中間領域

- 「西側は庭園をゆっくり眺める縁側等の鑑賞空間、東側は農体験等の緑・農と人との交流を促す土間等の活動空間を設け、屋内外展示と連携して自然を体感できる豊かな中間領域とします」が評価できる。

リアルとデジタルが融合する渡り廊下

- 「南面はデジタルサイネージと上下スリット窓を設け、ゴルフ練習場の人工景観は制御しつつ光や風を取り入れます」が評価できる。

分野を超えた統合プラットフォームによる検証・反映

- 「点群等の実空間データに、BIM、屋内外展示等を重ねた仮想空間を構築し、会場全域からの見え方や展示との融合を多角的に検証・反映します」が評価できる。
- 「関係者がリアルタイムで情報共有・検証できるクラウドシステムを活用し垣根のない体制構築を支援します」が評価できる。

■ 特定テーマに対する技術提案②(様式7-2)

A 環境性能・経済性・施工性を踏まえた構法・材料選定

博覧会後を見据えた循環型社会に貢献する 3R 手法

- 「主要構造部に一般流通木材を使用した三間グリッド構成や構造用合板、三六版の規格に合わせた内装計画等モジュール化の徹底により、使用材料を最小化するとともに端材発生を抑制します」が評価できる。

B 上瀬谷の生態系に寄り添う環境配慮手法

生態系と調和する施設計画・グリーンインフラ

- 「高床形式(独立基礎)により掘削土量・地形改変を最小限とするとともに、床下

に風の通り道を確保し昆虫など小動物の移動を阻害しない計画とします」が評価できる。

■ 特定テーマに対する技術提案③(様式7-3)

B 展示と木架構が融和する内観デザイン

展示空間と木架構が調和したデザイン

- 「展示室の形状や与条件に適した架構形式を選定し、木架構を現しで見せる計画とします。木架構と一体的な植物展示や照明等、木架構と展示を融合して見せる手法を取り入れます」が評価できる。

大スパン架構の渡り廊下

- 「渡り廊下は、流頭周りの地形改変を避けられるよう、木造ラチス構造による大スパン架構(25m 程度)とします。建物内外から木架構が視認でき、渡り廊下内からは架構に触れられ、体感できる空間を作ります」が評価できる。